

大阪歴史博物館 特別企画展
「い かい ほう こう異界彷徨—怪異・祈り・生と死—」
を開催します



大阪歴史博物館では、令和5年(2023)4月28日(金)から6月26日(月)まで、6階特別展示室において、特別企画展「異界彷徨—怪異・祈り・生と死—」を開催します。

古くから、人びとは自分たちのいるところとは異なる世界、すなわち「異界」を意識してきました。人知の及ばない現象は、異界の住人が引き起こすものであると畏怖し、我が身に降りかかる災いは、他界に属する神や仏へのひたむきな祈りによって退けようとしてきました。新たに生まれる命を喜び、成長を祝い、また死者を手厚く弔う際にも、さまざまな儀礼を行ってきました。天変地異や災厄の原因を理解し、生の苦しみや死の恐怖を克服するために人びとはこの世ならざる世界を想像してきたのであり、異界とは私たちの生活を基層で支える概念ともいえるものです。

本展では、当館の館蔵品を中心に、民間信仰にかかわる器物や祈願品などの民俗資料をはじめ、祭祀具や副葬品などの考古資料、他界観や神仏、妖怪などをあらわした絵画資料や歴史資料など、異界にまつわるあらゆるジャンルの資料を紹介します。さまざまな状況であらわれ出る異界を、私たちはどのように捉え、交渉し、また対応してきたのか。このことについて、さまざまな視点を交えながら考える契機となれば幸いです。

主な展示資料

てんぐ 天狗像

江戸時代後期～明治時代 大阪歴史博物館蔵(中尾堅一郎氏寄贈)



中国では、凶兆を示す流星を天狗といました。日本では、仏敵であり、飛行能力をもつ有翼の障魔しょうまとなり、さらに山中での怪異や山神信仰、修験道における山伏などの性格が習合し、中世以降、さまざまな天狗がうまれました。画面には赤い大天狗と青い小天狗が向かいあい、その足元には水が流れています。さらにその奥には、羽団扇と巻物を持つ天狗が坐しています。天狗が持物しもつとして巻物を持つ例はあまりみられず、巻物が描かれた理由はわかりません。しかし、修験道の開祖ともされる役行者の持物えんのぎょうじゃに錫杖しゃくじょう、独鈷杵どっこしよのほか、経巻があることから、山岳仏教との関係性が想像できます。

しゅしょうき にわとうけい 朱鍾馗図 丹羽桃溪筆

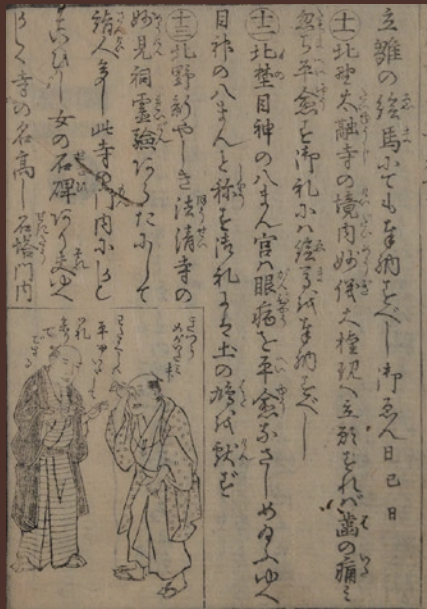
文化8年(1811) 大阪歴史博物館蔵(松村恭一氏寄贈)

鍾馗は、病魔を祓うとされる神です。病に苦しむ唐の皇帝・玄宗げんそうの夢中にあらわれ、疫鬼えききを食い殺しました。目覚めると玄宗の病は癒え、以降その姿を描くようになったとの故事に由来します。日本にもこの習俗が伝わり、厄除けとして鍾馗図が飾られました。「朱鍾馗」は退魔の呪力をはらむ赤色で鍾馗を描く画題です。後ろを振り返る鍾馗の左手には小鬼が捕らえられ、叫ぶかのように大口を開けています。右下には「辛未端午」とあるので、この絵は端午の節句に飾られたのでしょう。作者の丹羽桃溪(1760～1822)は江戸時代の大坂で活躍した絵師で、『摂津名所図会』の挿絵を描いたことでも知られています。



がん かけ ちょう ほう き
『願懸重宝記』

文化13年(1816) 大阪歴史博物館蔵



濱松歌国(1776~1827)の著書で、大坂や周辺地域における病氣平癒や諸願成就に靈驗ある神仏と祈念の方法などをまとめた本です。「十二 目神八幡宮立願の事」の項には、「北野目神の八まん宮ハ眼病を平癒なさせ給ふ」とあります。挿絵では、右の男性が「目が痛む」と悩んでいると、左の男性が「私は平癒したお礼参りだ」と返し、その手には鳩の土人形が握られています。「御礼には土の鳩を献ず」とありますが、鳩は八幡神の神使とされ、報恩のために献上したのでしょう。ほかにも疱瘡や痔疾の平癒、厄除け、商売繁盛などの靈驗が記載され、近世大坂における庶民の現世利益信仰をありありと物語ります。

まもりかたな まもりぶくろ
守刀・守袋

江戸時代後期~明治時代

大阪歴史博物館蔵(鴻池善右衛門氏寄贈)



大坂の豪商・鴻池家に伝来した婚礼道具のうち、刀掛けである「守掛」一式に含まれていた守刀と守袋です。守刀は魔除けのための刀剣で、結婚に際し、花嫁にこれを持たせるという風習がみられます。古くから刀剣には退魔の力があると信じられており、鉄の持つ靈力と刃の切断力を呪力の根幹としています。守袋は護符を入れる小型の袋で、こちらも災害や病氣などを避けるためのものです。宮参りの際、赤ん坊に降りかかる災いを避けるべく、守刀に守袋を下げて携行するなど、両者は取りあわせられることも多いものです。刀を入れる袋と守袋には吉祥文様である宝尽くしの模様が施され、厄除けの意だけでなく、婚礼の喜びも感じとれます。

すが たて ひこ
地こく変 菅楯彦筆

明治41年(1908) 大阪歴史博物館蔵



(部分)

重い罪を背負った者は死後、地獄道に墮とされ永遠に責め苦しめられる。この恐怖を描いたのが地獄図であり、悪行を戒め善行に励むよう諭す意味合いもありました。一方で、冥界への想像力が人びとの興味を掻きたてたことも事実です。地こく変(地獄変)は、近代大阪で活躍した画家・菅楯彦(1878～1963)が明治41年に高野山を訪ねた折に描いたもので、箱書きには「同行の二童子に戯に書き与へるものなり」とあります。この場面では、獄卒そつが連れてきた亡者えんまおうを、閻魔王えんまおうが身を乗り出し喝破しています。その左では、獄卒が亡者を掴み、生前の悪行を写す浄玻璃鏡じょうはりのかがみの前に突き出しています。全体が戯画的に描かれ、地獄の裁きという戦慄の光景にも関わらず、どこか親しみのある絵となっています。

関連行事

講演会「異界を覗く一日本人の幻想世界」

【日時】令和5年5月13日(土) 午後2時～3時30分(受付: 午後1時30分～)

【講師】小松和彦氏(国際日本文化研究センター 名誉教授)

【会場】大阪歴史博物館 4階 講堂

【定員】180名(要事前申込)

【参加費】500円

【参加方法】事前予約制(先着順)

参加券はチケット予約サイト『PassMarket』でお申し込みください。

※申込開始は4月14日(金)の予定です。

担当学芸員によるスライドトーク

【日時】令和5年4月29日(土・祝)、5月27日(土)、6月10日(土)、6月24日(土)
いずれも午後2時～(約30分)(受付: 午後1時30分～)

【講師】俵和馬(大阪歴史博物館 学芸員)

【会場】大阪歴史博物館 4階 講堂

【定員】180名

【参加費】無料(常設展の観覧券もしくは半券提示が必要です)

【参加方法】当日先着順

※関連行事の詳細は、特設ホームページ(<https://ikai-houkou.com>) または当館ホームページ(<http://www.mus-his.city.osaka.jp/>) をご覧ください。

開催概要

【名称】 特別企画展「異界彷徨—怪異・祈り・生と死—」

【会期】 令和5年(2023) 4月28日(金)～6月26日(月)

【休館日】 火曜日 ※5月2日(火)は開館

【開館時間】 午前9時30分～午後5時 ※入館は閉館の30分前まで

【会場】 大阪歴史博物館 6階 特別展示室
〒540-0008 大阪府中央区大手前4-1-32
電話 06-6946-5728 ファックス 06-6946-2662
<http://www.mus-his.city.osaka.jp>
(最寄駅) Osaka Metro谷町線・中央線「谷町四丁目」駅②・⑨号出口
大阪シティバス「馬場町」バス停前

【観覧料】 常設展示観覧料で観覧いただけます。
大人600円(540円)、高校生・大学生400円(360円)
※()内は20名以上の団体割引料金
※中学生以下・大阪府内在住の65歳以上(要証明証提示)の方、
障がい者手帳等をお持ちの方(介護者1名を含む)は無料

【主催】 大阪歴史博物館

【展示資料数】 約200件

展覧会公式サイト <https://ikai-houkou.com>



取材について

取材をご希望の場合は、事前に下記までご連絡ください。

(連絡先) 大阪歴史博物館 企画広報課 企画広報係

電話 06-6946-5728 ファックス 06-6946-2662